

サザエさんたちの問いかけ

阪神大震災・瓦版なまず集成 2009-2017



なびかず、そまらず、たゆまず。

震災・まちのアーカイブ

サザエさんたちの問いかけ

阪神大震災・瓦版なまず集成 2009-2017



震災・まちのアーカイブ

発刊によせて

冊子編集の最中、西日本豪雨で各地に甚大な被害がもたらされました。6月には震度6弱の大阪府北部地震発生、これから先どうなるのか不安はつきません。

さて、「震災・まちのアーカイブ」は3月で設立20年をむかえました。ここに至るまでの道のりを振り返り、これからの時間に思いをはせ、『サザエさんたちの問いかけ』を発刊することにいたします。

始まりは「震災・活動記録室」から震災一次資料が移管された時です。

名前の由来は、震災の起こったまさにその地に資料を残そうということです。「震災資料を収集し後世に残す」「この震災から見えてきたことを考える場を作り記録として残す」ということを目指して、活動は始まりました。資料がきっかけで、人と人が出会いアーカイブが生まれ、そこでの新たな出会いが、私たちをここまで育ててくれました。

メンバーも年を重ね、健康上の問題や家族の問題など抱えながらの活動です。

ここに民間の小さなグループが20年間活動を続けてきたことを検証し記録に残し、他の被災地で活動している人々や後世の人々にも伝えたい、との願いを込めて冊子にまとめました。

代表 季村範江

被災地の記憶と記録を考える

震災・まちのアーカイブ 設立にあたって

震災発生から4度目の春をむかえます。このたび、私たちは、震災の記憶と記録を考えるグループ「震災・まちのアーカイブ」を設立しました。

阪神大震災は、安政江戸大地震、関東大震災と並ぶ大きな出来事です。「歴史地震」として、後世さまざまな角度から顧みられることだと思います。しかし、そのための未来の歴史資料、わずかに残された現在の震災一次資料は日々散逸の危機にさらされています。私たちは、資料を残すことを通じて、震災の記録を後世に伝える活動に取り組みたいと思います。

なぜ記録なのか。なぜ直接的な救援活動ではなく、記録を残すことなのか。

被災地では今なお震災の様々な問題が山積しています。それら問題群に個別に取り組むべきではないのかという思いにとらわれます。しかし、私たちはあえて一步距離をとり、記録の保存を現場にしたいと思います。記録を残すことは、私たち自身がこれまでを検証し、よりよい未来を自分の手で作るために欠くことのできない作業です。今、震災一次資料の保存に取り組み震災の記録を残すことは、遠回りしているけれども、震災の引き起こした問題を根もとの部分で考える確実な方法のひとつだと信じます。

旗揚げにあたって「アーカイブ」といういささか聞きなれない言葉をかかげました。私たちは、この言葉を掲げることこそ、震災の問題を考えるもうひとつの鍵ではないかと考えています。アーカイブ（英語では Archives アーカイヴズ、ドイツ語では Archiv アルヒーフ、フランス語では Archives アルシーヴ）とは、もともとは、史料そのもの、ないしは史料群をさす言葉ですが、同時に史料を集める機関（史料館・文書館など）を意味する言葉でもあります。ヨーロッパやアメリカでは、国立や州立、市立のアーカイブが歴史的に定着し、古文書や行政文書が保存されることで、歴史研究や情報公開など市民社会の形成に大きく寄与してきました。しかし、被災地の足元を見ると、アーカイブは存在するのでしょうか。被災した一人ひとりが、自らの記憶をたどりながら、様々な記録を検証することのできる場所。震災の問題を考えるためには、そのような場が必要であるという思いから「アーカイブ」という言葉を選びました。

そして、アーカイブが「まち」にあるということ。行政や学者・研究者だけが利用するのではなく、まさに震災を体験した私たち自身が、あるいはいつか現れる未来の誰かが、自らの記録を、このまちの中で残してゆく。アーカイブがまちの中にあることこそが、私たちが歴史を語り継ぐ鍵ではないかと思っています。私たちのささやかな集まりが、その一つのきっかけになれば、と考えています。

具体的な活動としては、当面次のようなことを考えています。

(1) 震災一次資料に関する調査・保存・整理を行います。私たち「震災・まちのアーカイブ」は、「震災・活動記録室」の収集した震災ボランティアの一次資料を引き継ぎます。引き継いだ資料を整理し保存する。また、被災地における震災一次資料の保存状況を調査する。そのなかから、まだ十分確立されていない震災一次資料の保存・整理の方法について考えてゆきたいと思います。

(2)被災地でまちのアーカイブづくりのお手伝いをします。膨大に生み出された震災一次資料を何らかの機関で全て収集することは不可能です。そうではなくて、資料を生み出した人・機関が自らその資料を保存してゆく。震災一次資料保存の最も確実な方法とは資料を生み出した人自身がアーカイブを作ることです。既に、いくつかの元避難所や仮設住宅、ボランティア団体ではアーカイブが芽生えています。その芽を地域の人と一緒に育てながら、被災したまちにアーカイブ活動を根づかせたいと思います。

(3)被災地の記憶と記録を考える作業を行います。震災後、さまざまな形で記憶が問題になりました。亡くなった人の記憶、過去に神戸を襲った災厄の記憶、まちの記憶、そして震災の記憶。これらの記憶と記録はどのような関係なのでしょう。記録を残すことは、私たちの記憶とどのように結びついているのでしょうか。被災地の記憶と記録の問題について考えてゆきたいと思います。

(4)以上のような活動をもとに震災の記録を保存することの意味を考える通信「瓦版なまず」を発行します。被災地で震災記録保存はどのように取り組まれているのか、その課題はなにか。これらを見渡すことのできるメディアは、今のところ存在しません。震災記録保存に取り組む様々な団体と協力しながら、情報を共有できる場を作りたいと考えています。

それにしても、と思います。「被災地の記憶と記録を考える」とはなんと難しい課題か、と。出来事は誰かが記憶し、何度も思い起こしながら表現されなくては、沈黙に閉ざされてしまいます。記憶することとは、深い沈黙に思いを寄せる精神のあり方。私たちが、記憶や記録を考える時、同時に沈黙に向き合っていることを忘れてはならないと思います。沈黙の深さと重さを心に刻み、そこから記録の問題を考えること。その作業を、一つの限定された地域の問題としてではなく、様々な地域や歴史の広がりや念頭に置いて行うこと。私たち自身の姿勢が問われているように感じています。

震災から3年、いささか出遅れたささやかなスタートですが、志は高く、そして一歩づつ地道に歩くことから始めたいと思います。

被災地の記憶と記録を考える

震災・まちのアーカイブ

The people's earthquake archives

〒653-0022 神戸市長田区東尻池町 1-11-4 神港金属㈱内

Tel 078-681-6231 078-681-6232



お知らせとお願い

- 上記の趣旨に賛同される方、是非会員として私たちの活動に加わってください。
- 今のところ、週1回活動しています（第2・第4土曜日と、第1・第3週の平日）。
- 資金ゼロ、市民の手弁当の活動です。賛助会員になっていただけるとありがたく存じます。個人1口1千円、法人1口1万円をお願いします。振込先：さくら銀行長田支店(普)6917717
- お問い合わせは、季村範江 078-781-8891 「震災・まちのアーカイブ 代表・季村範江」
寺田匡宏 0797-22-5288 までお願いします。

発刊によせて 季村範江 ————— 003

被災地の記憶と記録を考える 震災・まちのアーカイブ設立にあたって ————— 004

寄稿 学び直す 季村敏夫 ————— 008

年表

震災・活動記録室(1995～1997) ————— 012

震災・まちのアーカイブ(1998～) ————— 014

木内寛子さんのこと ————— 027

最近の動き(2016～17年) ————— 041

阪神・淡路大震災メモリアルセンター 展示計画に関する公開提言 ————— 044

会員たちの声

伝えるということ 季村範江 ————— 050

埋もれようとするもの 藤原直子 ————— 053

「教訓として」ではなく 市村登和 ————— 055

語り、そして聞くこと 柴田和子 ————— 058

災害資料の展示について 水本有香 ————— 062

記憶と記録 佐々木和子 ————— 065

所蔵資料概要 ————— 069

『瓦版なまず』集成（第25号～第31号）

第25号	2009年4月12日	—————	086
第26号	2011年3月26日	—————	094
第27号	2012年4月28日	—————	102
第28号	2013年4月14日	—————	110
第29号	2014年3月30日	—————	122
第30号	2015年5月17日	—————	130
第31号	2017年3月19日	—————	142

学び直す

季村 敏夫

記憶に関しても、記録に関しても、認識の決定的な変更を強いられる現在である。ロッキード事件の児玉誉士夫や小佐野賢治らの発言「記憶にございません」、当時は驚愕したもののだが、現在繰り返される茶坊主の発言と比較すると、四十数年前は彼らなりの志がいわしめたこと、遅れてわかる。メディアを賑わす記録の改竄、記憶に関する奇怪な言説、記録の焼却を命じるのは日本軍のお家芸だったが、21世紀に入りなお、なぜ繰り返されるのか。証拠隠滅の伝統は「忖度」を重要視する権力機構にそのまま温存されているのか。しかもこの事態をなぜゆえにゆるし、政権を支持する青年層をなぜゆえに形成してしまったのか。かつての驚愕は吹っ飛び、暗澹の底はついに破れる。むごたらしい事態が到来したのだ。

過日、約1カ月滞在したドイツ、オーストリアから帰国した友人と会った。当地の有力新聞に日本に関する記事はまったくいいほど載っていない、ということは、彼らのポリティカルな関心からアメリカの従属国日本は抜け落ちているということ。反面、難民移民の記事は連日、プーチンやトランプ大統領の動向も然り。日本の青年にはほとんど出会うことはなかったが、台湾や韓国、中国からの好奇心旺盛な青年には至る所で出会ったとか。

とはいえ、ご当地神戸にも震災などの記録に関わるグルー

プがある。今回は自らの存立根拠を根こそぎに否定されたのだから、公的な応答があつてしかるべきだが、現状はどうか。見て見ぬふり、黙過は一人ひとりの問題である。

いまや女性だけとなった「震災・まちのアーカイブ」も、このむごたらしさから無縁ではありえない。記憶や記録に地べたで関与してきた彼女たちも、いわば致命傷といってよい事態に襲われている。またそれゆえにこそ、議論の合間の団らんには活路を見出すのであろうか。

阪神大震災の翌年の7月、熊本市の石牟礼道子さんの仕事をたずねた。そのときの石牟礼さんのたたずまい、記憶と記録の問題に決定的瓦解を通告された今こそたいせつである。姿勢は低く、あくまで低く、ていねいな身ぶり。小さな仕事部屋の空気は石牟礼さんの一挙手一動で微妙にふるえる。唇をひきすえて発せられる「患者さんたち」、この響きこのことばは漬物石となって沈む。襲いかかる受難さえ、「のさり」、天の恵みとしてのさったのだと受けいれる水俣病の患者さん。「人間の負うたことのない荷ば負うて」示した漁師さんらの尊い精神、あらがいを試みるなかで学び直そうとおもう。

眼前に寺田匡宏著『カタストロフと時間』（京都大学学術出版会、2018年3月）がある。888頁、渾身の書。もっと早く知っていたならば、拙文はこの本に捧げられたであろう。阪神大震災以降の言説はことごとくなぎ倒された。著者の孤独、世界を考察することへのあくなき探究心と粘着力、端倪すべからざるものがある。

年 表



震災・活動記録室／震災・まちのアーカイブ事務所

(1995～2016)

年表中の人名等は敬称を略します

震災・活動記録室（1995～1997）

1995（平成7）年

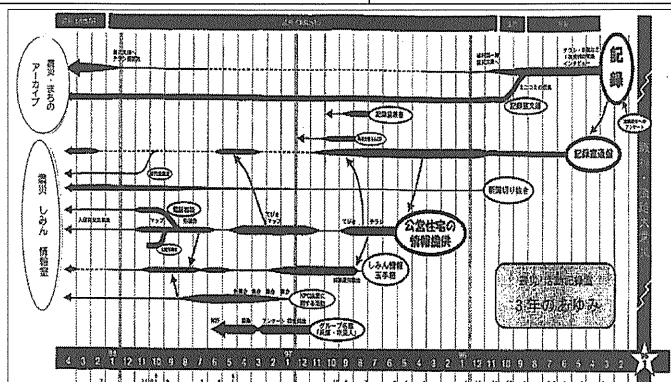
月日	出来事(震災・活動記録室)	月日	出来事(被災地内外)
3. 27	震災・活動記録室設立	1. 19	阪神大震災地元 NGO 救援連絡会議設立（記録室の母体）
5. 13	「やったことを記録に残すボランティア大集会」を開催	2. 1	仮設住宅への入居開始
6. 1	サハリンへ救援物資運搬	3. 17	都市計画決定
8. 1	震災・活動記録室「中間報告」発行	3. 20	地下鉄サリン事件発生
9 月	NGO 連絡会議から独立、三宮へ引越し	4. 1	阪神・淡路大震災復興基金設立
10 月	「震災記録を残すライブラリアンネットワーク」に参加	5. 28	サハリン北部で大震災
11 月	長田区東尻池へ引越し／浦部法穂（神戸大学・憲法学）を訪ねての勉強会	8. 11	仮設住宅 48,300 戸完成
		8. 20	避難所が「待機所」に
		10. 31	復興公営住宅第 1 次募集（～11. 15）
		12. 15	KOBE ルミナリエ開幕（～12. 25）

1996（平成8）年

1 月	野田正彰（精神科医）を囲む会開催	2 月	政府の阪神・淡路復興委員会解散／県、仮設住宅を全戸調査
5 月	鷹取中学校でのボランティアフォーラムに参加	7. 31	復興公営住宅第 2 次募集（～8. 20）
7 月	「前例のない市民大集会」に参加／季村敏夫・範江、石牟礼道子（熊本市）訪問	10 月	東京水俣展
10 月	東京水俣展、世田谷雑居まつりに参加／実吉威、神戸復興塾に参加		

1997 (平成9) 年

		1.2	日本海重油流出事故
		2.27	復興公営住宅第3次募集(～3.19)
		3月	神戸連続児童殺傷事件
		4月	公的援助法実現ネットワーク結成(記録室も団体参加)
5月	ウラベノリコ、勉強会「震災とは何だったのか」参加(～7月)	5月	超党派議員、「公的援助法案」を参議院に提出
6月	実吉威「NPOフォーラム97'in かながわ」に参加/実吉威「りんりん」合宿に参加	6月	「公的援助法」、継続審議に(参院)/NPO法案は衆院を通過
7月	実吉威・八十庸子、NPOセンター研究会に参加		
9月	実吉威「NPOフォーラム98'」準備会に参加	9月	県外被災者向け公営住宅募集/復興公営住宅第4次募集(9.26～10.28)
10月	よろず相談室(牧秀一主催)の活動に参加	10月	コレクティブハウジング募集
10月	世田谷雑居まつりに参加	10.27	神戸市長選挙
11月	「孤独死」勉強会を開催		
	季村敏夫・笠原芳光編『生者と死者のほとり』発行	12.12	臨時国会閉会(公的援助法、NPO法案とも継続審議に)



震災・活動記録室 3年のあゆみ

震災・まちのアーカイブ（1998～）

1998（平成10）年

月日	出来事(震災・まちのアーカイブ)	月日	出来事(被災地内外)
2. 19	鷹取中学校訪問、保存資料調査		
3. 14	震災・まちのアーカイブ設立	3. 9	神戸・長田の「神戸の壁」、淡路で永久保存へ
3. 28	研究会「家族の崩壊について-阪神大震災・神戸児童殺傷事件から見えてきたもの」発表:季村敏夫	3. 19	特定非営利活動促進法（NPO 法）成立、施行は12月
		3. 28	神戸東部新都心、西宮浜、南芦屋浜でまち開き
		4. 2	淡路に震災記念公園オープン
		4. 5	本州と四国を結ぶ世界最長のつり橋、明石海峡大橋が開通
5. 21	喫茶「アール」で森山千代江に、神戸野田高校で西畑康次（教諭）に聞きとり	5. 15	最高100万円支給の被災者生活再建支援法が国会で成立
5. 30	なまずブックレット『エチカ・震災精神史への試み-家族の崩壊 家の崩壊』発行		
7. 18	朝日新聞記者・井上平三来室、研究会『ナショナリズムとジェンダー』（上野千鶴子著）		
8. 5	「ゼンカイの家」（宝塚市）訪問、宮本佳明（建築家）へ聞きとり		
8. 27	六甲グランドパレス（神戸市灘区・被災地クラブ）訪問		
8. 29	野島断層祈念館、北淡町歴史民俗資料館訪問		
9. 5	六甲グランドパレスで「被災地クラブ」取材		
9. 29	全国マンション管理組合連合会事務局長・谷垣千秋を訪問（京都市）		
10. 24	「公費解体」研究会		

12.17 朝日新聞記者・角谷洋子来室、鷹取中学校でボランティアルームに保管してある資料について話し合い

●主な活動

- 震災・まちのアーカイブ設立（3月14日）
- 「瓦版なまず」創刊（7月2日）
- 公費解体についての研究会

・「被災地クラブ」六甲ブランドパレス訪問
マンションの建て替え問題への関心

・「ゼンカイの家」(宝塚市) 訪問

＊宮本佳明（建築家）が全壊判定をうけた木造の長屋
一棟を鉄骨によって補強して、アトリエに転用



●出版物

□『エチカ・震災精神史への試み—家族の崩壊 家の崩壊』
(なまずブックレット)

←研究会「家族の崩壊について—阪神大震災・神戸児童殺傷事件からみえてきたもの」

□「瓦版なまず」 1～3号 編集人 寺田匡宏

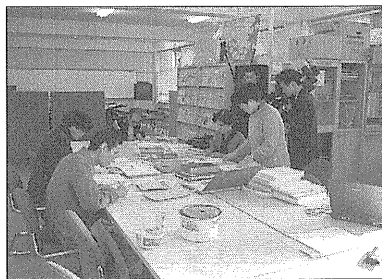
鷹取中ボランティア・アバウト

森山千代江さん

神戸野田高校避難所、仮設住宅に移ってからボランティア活動を続け
自宅再建後に喫茶「アール」を再開、近隣の住民に憩いの場を提供して
いました。アーカイブ活動の一環として、神戸野田高校が避難所であつ
た当時の聞き取りや資料閲覧の際も尽力して下さいました。いつも自分
のことより他人の世話に明け暮れ、自身の体調不良に気が付くのが遅れ
たのか、突然の訃報に言葉がありませんでした。

1999（平成11）年

- | | |
|---|---|
| <p>1. 21 鷹取中学校避難所資料現地地整理
ボランティア神生善美が同席</p> <p>2. 4 尼崎市立地域研究資料館調査員菅祥明来所</p> <p>3. 18 鷹取中学校避難所、資料現地整理</p>
<p>4. 3 年次総会</p> <p>4. 15 鷹取中学校避難所、資料現地整理</p>
<p>5. 20 菅祥明・蘇理剛志来所、両者の協力を得て、資料公開に向け整備</p> <p>6. 21 寺田匡宏、阪神・淡路大震災記念協会「震災メモリアルセンター」構想についてヒアリング</p> <p>6. 29 季村範江「震災・しみん情報室」訪問、震災活動記録室資料の整理・移管について打合せ</p> <p>7. 5 一橋大学大学院生山本唯人来所、御蔵・新長田・鷹取中学校を案内</p> <p>7. 10 「震災・しみん情報室」にて保存資料の調査・一部移管</p> <p>8. 26 季村範江・佐々木和子「震災・しみん情報室」実吉威、八十庸子と震災活動記録室収集資料の保存体制について話し合い</p> <p>9. 6 季村範江・佐々木和子「震災・しみん情報室」実吉威、八十庸子と震災活動記録室収集資料の保存体制について話し合い</p> <p>9. 11 浜畑啓悟氏資料受入</p>
<p>9. 25 「震災・しみん情報室」より「震災・活動記録室収集資料」一部移管（図書）</p> <p>11. 4 鷹取中学校避難所資料現地調査、神戸野田高校避難所資料保存地「アール」訪問</p> | <p>1. 9 神戸市東灘区に震災遺児ケアのレインボーハウス完成</p> <p>2. 15 神戸の観光客数が震災前に戻る</p> <p>3. 9 神戸市東灘区の森南町2丁目がまちづくり案提出、神戸市の区画整理事業がすべて動き始める</p>
<p>5. 11 兵庫県内の全復興公営住宅が完成</p> <p>5. 28 神戸国際会館で復興オープン記念式典（震災で全壊し、復興のシンボルとして再建工事）</p> |
|---|---|



鷹取中資料整理の様子

- | | |
|--|-----------------------------|
| <p>12. 2 NHK「発信基地」取材 NHK 仙波加奈子来所、NHK 取材で「アール」にて森山千代江に一次資料の聞きとり</p> <p>12. 4 NHK「発信基地」取材で鷹取中学校避難所現地調査、資料整理風景を収録、同中学校「お弁当づくり隊」活動した河本秀子・久美子に聞きとり</p> <p>12. 11 毎日新聞学芸部記者岸桂子来所、「市民活動センター」八十庸子来所、「震災・活動記録室」一次資料を引き継ぎ、「発信基地」放映</p> | <p>12. 20 神戸市の仮設住宅が全面解消</p> |
|--|-----------------------------|

●主な活動

- 鷹取中学校避難所資料 現地調査（ボランティア 神生善美が常に同席）
 - 現地で目録作成
 - NHK 取材「発信基地」で放映
- 震災・活動記録室所蔵資料の引き取りをめくって、調整
 - 一部移管へ

●出版物

- 「瓦版なます」4～7号
編集人 寺田匡宏

●受け入れ資料

- 浜畑啓悟氏資料

鷹取中ボランティア・ポコアポコ

神生善美さん

神戸市立鷹取中学校の避難所で、被災者でありながらボランティア活動を始め、避難所解散後は、鷹取中学校から他に移った人たちの連絡係や支援、中学校に残した物資や資料の管理を託されていました。アーカイブが鷹取中学校の震災資料の整理を始めた時、物心両面で支援してくだり、その折々に避難所当初の話を、ユーモアを交えた独特の語り口で話して下さいました。

なお、鷹取中学校避難所閉鎖前後に、男性グループは、ポコアポコを、女性グループはアバウトを設立し、仮設住宅に住む被災者達を支援。

2000 (平成 12) 年

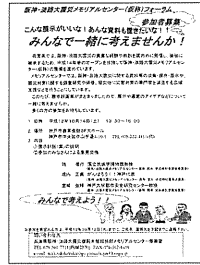
- | | |
|--|--|
| <p>1. 16 読書会「百合」を読む会、報告：著者河村直哉「いくつもの、つながりの中で生きる-『百合』『地平の廃墟から』、そしてまた『百合』へ」
大門正克（横浜国大）参加</p> <p>2. 26 記録と記憶を考える講演会 佐々木幹郎（詩人）「資料のぬくもり - 中原中也全集編集から見えてきたもの」</p> <p>7. 4 住吉グループメンバー（笠原和子・市来・石原絹恵・中山美恵子）来室</p> <p>7. 19 寺田匡宏・季村範江が兵庫県災害復興本部メモリアル準備室訪問</p> <p>7. 25 寺田匡宏・笠原一人、兵庫県庁にてメモリアルセンターについてヒアリング</p> <p>8. 17 朝日新聞記者井上平三来所、メモリアルセンターについて取材／阪神・淡路大震災資料調査事務センター調査員酒井優一ほか来所／寺田匡宏、兵庫県庁メモリアルセンター準備室訪問、議事録閲覧要望（情報公開請求）</p> <p>8. 21 兵庫県復興本部総括部復興企画課長藤原由成来所「第 1 回メモリアルセンター展示・交流検討委員会主な意見」持参</p> <p>8. 25 「市民活動センター・神戸」八十庸子、「みみずく」の取材／神戸新聞記者・西栄一、メモリアルセンターについて取材</p> <p>9. 21 寺田匡宏、兵庫県庁県民生活部企画調整局へ「ヘルスケアパーク」（メモリアルセンター二期工事）について取材</p> | <p>1. 12 「慰霊と復興のモニュメント」完成</p> <p>1. 14 被災地の仮設入居者ゼロに</p> <p>1. 27 被災者の家賃補助増額、兵庫県と神戸市など</p> <p>2. 23 政府の復興対策本部が解散</p> <p>2. 25 政府が「激甚災害」の指定基準を緩和へ</p> <p>3. 18 淡路花博開幕（～9.17）</p> |
|--|--|



10. 6 鳥取県西部地震

- 10.15 シンポジウム「阪神・淡路大震災をどう伝えるか」神戸大学震災資料に関する研究会主催、震災・まちのアーカイブほか後援、寺田匡宏パネリスト参加
- 11.16 寺田匡宏、季村範江、兵庫県庁メモリアル整備室に展示構想等について取材
- 12.21 読売新聞大阪本社写真部記者尾崎孝、鷹取中学にて取材、震災後のボランティアに関する特集のため、笠原一人ヨーロッパ建築史探訪報告

10.14 阪神・淡路大震災メモリアルセンター（仮称）フォーラム（兵庫県主催）



●主な活動

□メモリアルセンターの建設が表面化

メモリアルセンターについての情報開示を請求
 阪神・淡路大震災メモリアルセンター展示計画
 に関する公開提言（全文P.44 後掲）

→ 研究者、市民と展示について議論を求める

●出版物

□『百合との往還』（震災まちのアーカイブ編）

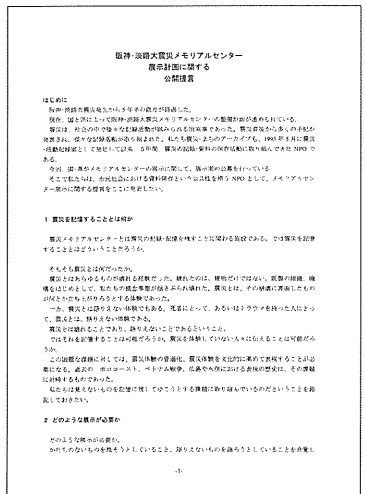
□『震災と言葉』（上念省三、季村敏夫）

□「瓦版なまず」8号

号外 震災メモリアルセンター 編集人 寺田匡

宏

●受け入れ資料 □住吉グループ資料



朝日新聞 記者

井上平三 さん

朝日新聞大阪本社学芸部記者。アーカイブ発足当初から事務所を訪れ、アーカイブが目指している震災資料の現地保存と市井の人々の声を残すことに共感されて、何回か紹介記事を掲載して下さいました。井上氏の記事に私たちもどんなに励まされたことでしょう。自身の闘病体験を書き続けて2002年4月亡くなられました。

2001 (平成 13) 年

- | | | | |
|--------|--|-------|--|
| 2. 8 | 寺田匡宏・季村範江、兵庫県庁メモリアルセンター準備室に展示構想について取材 | 2. 5 | 「世界防災会議 2001」が淡路で開幕 |
| 3. 15 | 「市民活動センター・神戸」に「震災・活動記録室」より引継資料の目録を渡す | 2. 21 | 神戸市長田区の鷹取東第 1 地区の区画整理事業が、自治体主体としては最も早く完了 |
| 4. 1 | 寺田匡宏が国立歴史民俗博物館へ、蘇理剛志が総合研究大学院大学へ | 3. 14 | 兵庫県教委が復興担当教員を初めて減員へ |
| 4. 28 | 辰巳大輔来室、ホームページ開設への協議 | 4. 23 | 気象庁がマグニチュード計算法の見直し決定（阪神・淡路大震災は M7.2 から M7.3 に修正） |
| 5. 19 | 「史料ネット」辻川敦、神戸新聞社大國正美来所、メモリアルセンター建設反対意思表示について意見交換 | | |
| 6. 3 | 「阪神・淡路大震災メモリアルセンター」展示交流検討委員島田誠を訪問 | | |
| 6. 13 | 菅祥明・笠原一人・季村範江、兵庫県メモリアルセンター整備室に計画の進捗状況を取材 | 6. 12 | 神戸市の人口が 150 万人に回復 |
| 7. 8 | フォーラム「阪神・淡路大震災をどう伝えるか - メモリアルセンターの問題を考える -」史料ネット主催・震災・まちのアーカイブ後援、笠原一人・菅昭明パネリスト | 7. 7 | 神戸市営地下鉄海岸線が開業 |
| | | 7. 31 | 貝原俊民兵庫県知事が退任 |
| 8. 19 | 「グループ 117」矢守克也来所、活動について意見交換 | | |
| 10. 1 | ホームページ正式公開 | | |
| 10. 20 | 宮本佳明（建築家）アトリエ訪問「ゼンカイの家」見学と聞きとり | | |

10. 27 「パートツーCo.LTD」柴山昌昭来所、児童向け演劇で震災の映像・写真使用の相談
鷹取中学校文化祭、避難所資料をコミュニティルームにて展示

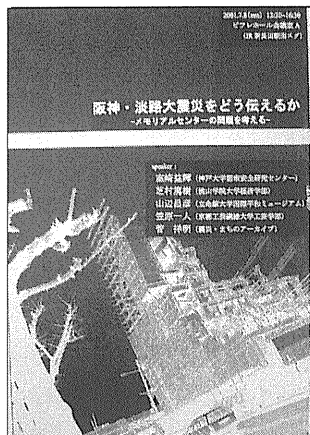
11. 19 柴山幸俊神戸市長が退任

11. 30 11月1日現在の推計人口で被災10市10町(当時)人口合計が初めて震災直前を上回る

●主な活動

□メモリアルセンターをめぐる議論本格化

→フォーラム「阪神・淡路大震災をどう伝えるか
メモリアルセンターの問題を考える」



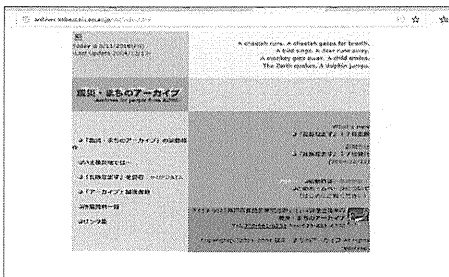
●出版物

□「瓦版なます」9~10号

9号編集人 寺田匡宏

10号編集人 菅 祥明

□ホームページ開設



アーカイブボランティア

萩原彰二さん

長田区在住で定年後、アーカイブのボランティア募集の新聞記事を見て、事務所に訪ねてこられ、資料整理の作業を半年間黙々と続けて下さいました。当時取り組んでいた資料を見返す度、萩原さんの迅速かつ丁寧な仕事ぶりに感心させられました。

2002（平成14）年

	1月	PTSD（心的外傷後ストレス障害）研究の学会発足へ
2.17		神戸大学で「震災の記録化に関する研究会」参加
4.27		毎日新聞事業団より 2002 年度助成の連絡、笠原一人によるニューヨークで開催された展覧会のスライド上映
	4.1	県立舞子高に「環境防災科」設置
	4.27	人と防災未来センターが開館
5.16		5周年記念冊子に向け記録室資料再点検
6.10		佐々木和子・季村範江 「市民活動センター・神戸」にて記録室資料の移管について意見交換
6.17		辰巳大輔 ホームページ上に WEB 版活動日誌「電腦日記」を設置公開
7.1		図書目録公開
8.3		「沖縄・メモリアルを考えるタベ」蘇理による沖縄巡検報告会／記述目録「中央区ボランティア」資料から実践決定
8.31		「中央区ボランティア」一次資料詳細目録作成開始
9.14		「サボテン」（東灘区岡本）にて、菅、水俣夏巡検報告会
9.6	9.6	被災者自立支援金の世帯主要件を緩和
10.17		朝日新聞神戸支社記者斎藤徳彦来所
10.19		「市民活動センター・神戸」実吉威に聞きとり
10.26		読書会『記憶 - 物語』（岡真理著）報告：木内寛子
11月		トヨタ財団助成共同研究「記憶・歴史・表現フォーラム」発足、アーカイブメンバー参加
11.7		鷹取中学校にて同校所蔵資料の現状調査
11.16		菅祥明、「史料ネット」に聞きとり
11.30		「市民活動センター・神戸」実吉威、山崎ゆりに聞きとり
	12.20	震災死者数、1人増え 6433 人に

●主な活動

□中央区ボランティア資料の整理

→目録作成（CD 作成）

□『アーカイブ前史』出版の準備

→ 実吉威、山崎ゆり（震災・活動記録室）聞きとり

□トヨタ財団助成共同研究「記憶・歴史・表現フォーラム」発足

→アーカイブメンバー参加

→ニュースレター『紙ヒコーキ』

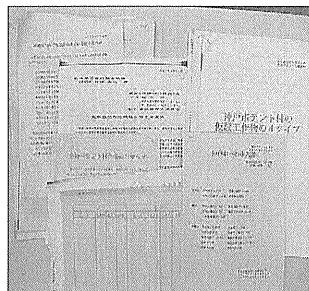
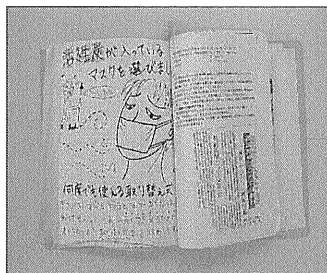
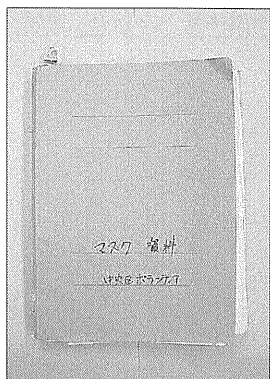
●出版物 □「瓦版なまず」11～13号 *13号 臨時特集「人と防災未来センター」

編集人 菅祥明

●受け入れ資料 □中央区ボランティア資料



中央区ボランティア資料



2003（平成15）年

2.22	和田稔邦来所「中央区ボランティアセンター」設立当時について聞きとり	
3.4	垂井加寿恵（中央区ボランティアセンター職員）に現在までの状況を聞きとり、同センター所蔵資料仮目録作成	
3.4	毎日新聞社会事業団「阪神大震災ボランティアサポート制度」2003年度支援団体に選出	
4.24	毎日新聞大阪事業団2003年度女性団体に選出	
5.8	「中央区ボランティア」資料の記述目録デジタル化検討	
6.9	神戸学院大学水本浩典他3名来所、鷹取中学校避難所資料共同調査について意見交換	
7.19	国立歴史民俗博物館主催フォーラム「新しい世紀の災害論」に参加	
7.20	国立歴史民俗博物館「ドキュメント災害史 - 703-2003 地震・噴火・津波、そして復興-展」寺田匡宏の案内にて見学	
8.21	「灘区ボランティア資料」の詳細目録の作成開始	8.28 震災を検証する兵庫県「震災10年委員会」発足
10.16	5周年記念冊子『アーカイブ前史』出版	10.3 神戸・三宮に「神戸マルイ」オープン
		12.17 「慰霊と復興のモニュメント」に市外犠牲者らを初めて追加

●主な活動

□中央区ボランティア資料の整理

→デジタル目録の作成

□灘区ボランティア資料の整理開始

□トヨタ財団助成共同研究「記憶・歴史・表現フォーラム」

●出版物

□『アーカイブ前史』出版

→ 中央区ボランティア資料 CD 添付

□「瓦版なます」14～15号

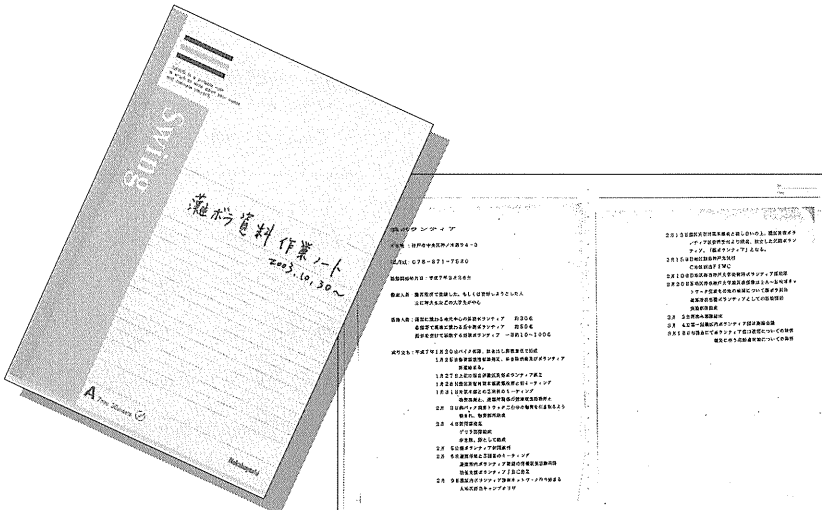
編集人 菅祥明

●受け入れ資料

□灘ボランティア資料



震災・まちのアーカイブでの保管状況



灘ボラ資料作業ノート

2004（平成16）年

- | | | |
|--------|--|---|
| 1. 17 | 神戸新聞震災10年目、季村範江、国立歴史民俗博物館研究員寺田匡宏両氏聞きとり記事掲載 | |
| | | 3. 21 県立広域防災センターが、三木市に完成 |
| | | 3. 31 被災者生活再建支援法の改正案成立、4月1日に居住安定支援制度施行 |
| | | 4. 1 兵庫県こころのケアセンター開設
PTSD(心的外傷後ストレス障害)などの全国初拠点施設 |
| | | 10. 23 新潟県中越地震 |
| 11. 28 | 木内寛子（設立メンバー）逝去 | 11. 1 神戸市の人口が阪神・淡路大震災前を上回る |

●主な活動

□トヨタ財団助成共同研究「記憶・歴史・表現フォーラム」

→ 震災・まちのアーカイブは、構想展の神戸事務所として活動

→ 震災・まちのアーカイブ所蔵資料の内、記録室から引き継いだボランティア資料の写しを「棚へー〈未来〉の配達のために」を展示

●出版物 □「瓦版なまず」16～17号

16号 編集人 菅祥明 17号 編集人 季村敏夫 市村登和

アーカイブボランティア

野津玲子さん

手書きの資料目録を電子ファイル化するに当たって、野津さんには目録入力作業に関して随分と助けていただきました。遠方から度々来訪してくださり、本業での経験を活かして、黙々と、穏やかに、にこやかでいらした印象が今でも鮮明です。ある一時期であっても深く関わってくださる方にも支えられての活動であることを、私たちは感謝の念とともに心に刻んでいます。



木内寛子さんのこと

2004年11月、木内さんは二度と会うことのできない人になってしまった。

木内さんは「震災・活動記録室」から「震災・まちのアーカイブ」の立ち上げに参加され、私達が活動を共にしたのは、アーカイブ発足から6年間のことであった。

詩人としての透徹とした佇まいとその言葉は、アーカイブの支えとなっていた。木内さんの確かな校正力で、私達は安心して多くの文章を世に出すことができた。阪神・淡路大震災と呼ばれる地震を、兵庫県南部地震と呼ぶことにこだわる人だった。寡黙な木内さんの口から発せられる言葉を聞き逃すまいと耳をそばだてていた。木内さんのいる場には、いつもわずかな緊張感があった。

発足当初から担当された会計のノート、資料目録には木内さんの手書きの文字が残されている。「瓦版なまず」に寄せた木内さんの文章も読み返すことができる。会えなくなってしまったが木内さんと、アーカイブの時間は今も止まってはいない。

(藤原直子)

2005年(平成17)年

- | | | | |
|------|---|-------|-----------------------------|
| 1.14 | 展示 いつかのだれかに阪神大震災記録の〈分有〉のためのミュージアム構想 展 (CAP HOUSE) | 1.12 | 政府の地震調査委員会が六甲・淡路島断層帯長期評価を発表 |
| 2.3 | アーカイブ「休止宣言」掲示板に掲載 | 1.17 | 阪神・淡路大震災から10年。兵庫県内各地で追悼式 |
| 8.27 | 9月よりアーカイブⅡ期再開することを掲示 | 8.8 | 震災の影響を高校入試合否の判断材料とする臨時措置終了 |
| | | 9.1 | 兵庫県独自の「住宅再建共済制度」がスタート |
| | | 9.17 | JR 六甲道駅南地区再開発事業が完了 |
| | | 12.22 | 阪神・淡路大震災死者 6434人 |

●主な活動

□someday,for somebody いつかのだれかに 阪神大震災・記憶の〈分有〉のためのミュージアム構想|展

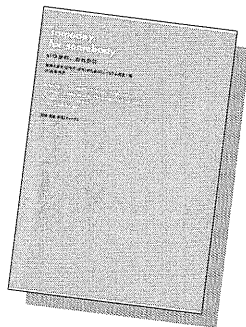
2005年1月14日～1月23日

場所：CAP HOUSE (旧神戸移住センター)

神戸市中央区山本通3丁目19-8

●出版物

□『someday,for somebody いつかのだれかに阪神大震災記録の〈分有〉のためのミュージアム構想|展 2005年 冬 神戸』 ([記憶・歴史・表現]フォーラム)



アーカイブ「休止宣言」と再開について

震災10年を記念して「阪神大震災・記憶の〈分有〉のためのミュージアム構想 | 展」にアーカイブも参加した。展示準備に1年以上を費やし、目まぐるしい日々を送った。

展示終了後しばらく休息して今までの活動を振り返り、これから先どうするか各自で考える時間を持つということになった。

しかし、そのなかでもこれからの活動を模索する集まりは持ち続けていた。話し合ううち、私たちにはまだやり残したことがあるのではないかと次第に考えるようになってきた。

その間、設立当初からのメンバーだった木内寛子さんが亡くなられ、共に避難所でボランティア活動をしながらアーカイブの活動を支援してくださった森山千代江さんも他界され、大きな衝撃を受けた。また資料を介して出会いが始まったり、さまざまな別れと出会いが私たちの活動再開の後押しをしてくれたように思う。

2006 (平成 18) 年

- | | | |
|--------|--------------------------------------|--------------------------------------|
| 1. 15 | 読書会「クオリアについて…」『脳と妄想』菅祥明報告 | |
| 1. 28 | 灘ボランティアラ資料まとめについて協議、清水信年（元灘ボランティア）来室 | |
| 1. 30 | 「震災資料保存・活用に関する研究会」参加（人と防災未来センター） | |
| 2. 18 | 読書会「偶然と運命」（九鬼周造著） | 2. 16 神戸空港開港 |
| 3. 15 | 「震災資料保存・活用に関する研究会」参加（人と防災未来センター） | |
| 3. 21 | 読書会「資料とは何か - ハイデガーの時間論」 | |
| 4. 1 | 篠山合宿 中村由紀子（元灘ボラ）訪問 | 4 月 「兵庫県版 DMAT（災害派遣医療チーム）」を独自に育成 |
| 4. 2 | 細見和之（大阪府大・詩人）訪問 | |
| 4. 8 | 都賀川公園（灘ボラ活動地）でビデオ撮影 | |
| 4. 16 | 「瓦版なまず」第 18 号発行 | |
| 5. 9 | 清水信年と会う | |
| 5. 17 | 「瓦版なまず」講評会 | 5. 19 阪神・淡路大震災被害全容確定 |
| 5. 26 | 毎日新聞記者中村一成来室 | |
| 6. 25 | 読書会「資料解読方法-ベルクソンの痕跡過剰性に触れながら」 | |
| 7. 12 | 三木まさよ（元灘ボラ）に聞きとり | |
| 7. 18 | 「瓦版なまず」第 19 号発行 | |
| 8. 5 | 読書会「他者と死者 - ラカンによるレヴィナス」（内田樹著） | 9. 30 「のじぎく兵庫国体」開幕 |
| 9. 2 | 研究会、林律子（コープ活動サポートセンター） | 10. 4 旧神戸新聞会館跡地に「ミント神戸」オープン |
| 10. 7 | 「瓦版なまず」第 20 号発行 | 11 月 兵庫県と県内 41 市町が協定（災害時に自治体間で相互に応援） |
| 10. 15 | 神戸大学主催のシンポジウム参加 | |

2007 (平成 19) 年

- | | |
|-------|------------------------|
| 1. 7 | アーカイブカフェの打ち合わせ(1.23 も) |
| 1. 14 | カフェでの動画撮影、DVD 化の準備 |

1. 16	神戸新聞三上喜美男来室		
1. 20	「瓦版なまず」第21号発行		
2. 4	アーカイブカフェ「ボランティアという生き方-語りと音楽がつなぐ」みみずく舎	2. 13	兵庫県07年度予算案、震災復興関連の新規事業ゼロに
2. 11	邦波さん資料（ミニコミ）借りに来室		
2. 27	「震災資料保存・活用に関する研究会」参加（人と防災未来センター）		
6. 17	「瓦版なまず」第22号発行	5. 27	「カトリックたかとり教会」再建キリスト像も元の位置へ
7. 15	DVD「ひとがためらうとき」試写会	7. 16	新潟県中越沖地震
		10. 1	気象庁、緊急地震速報の一般市民への提供開始
12. 19	季村範江・佐々木和子が兵庫県庁に助成金の件で訪問（なまず合本作成、25日採択）	10. 22	復興区画整理で初の強制移転
		11. 9	改正被災者生活再建支援法が成立施行は12月

●主な活動

□読書会

- ・「クオリアについて」（茂木健一郎『脳と妄想』）
- ・「偶然と運命」（九鬼周造）
- ・「資料解読方法-バルクソンの痕跡過剰性に触れながら」
- ・「他者と死者-ラカンによるレヴィナス」（内田樹）など

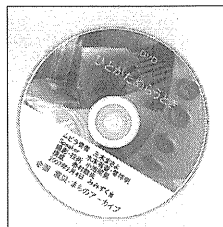
□アーカイブカフェの実施

- ・「ボランティアという生き方-語りと音楽がつなぐ」

会場：みみずく舎（神戸市中央区元町通）

「ムピラ」（ジンバブエ 民族楽器）演奏 元灘ボランティア 三木まさよさん

⇒ DVD「ひとがためらうとき」を作成



●出版物

- 「瓦版なまず」 19~22号 編集人 季村敏夫
- DVD「ひとがためらうとき」

2008 (平成 20) 年

- | | | |
|-------|--|--|
| 1. 2 | 「瓦版なまぜ」第 23 号発行 | |
| 3. 9 | 「瓦版なまぜ」第 24 号発行 | 3. 24 兵庫県が「復興局」3 月末廃止
4 月、防災企画局に復興担当課
設置 |
| 3. 19 | 『サザエさんたちの呼びかけ』完成
祝い | |
| 3. 23 | なまぜ集成『サザエさんたちの呼び
かけ』 | 3. 27 石綿健康被害の疫学調査を兵庫
県が計画 |
| 3. 31 | 「瓦版なまぜ」第 25 号発行 | |
| 4. 25 | 読売新聞酒本記者来室 | |
| 5. 17 | 詩の朗読会参加(すみとも正成、小池輝
男 於：元町モトコー)、カフェ候補地
見学、神戸市灘区水道筋商店街 | 5. 12 中国・四川大地震 |
| 6. 15 | 鷹取中学校倉庫取壊、救援物資寄贈 | |
| 6. 20 | 佐々木康哲(藤原直子の兄)逝去 | |
| 9. 11 | 早稲田大学大学院生牧山優子、修士論
文、震災の記憶に関する聞きとりのため
来室 | |
| 10. 2 | ノンフィクション作家佐野眞一、新潮社
記者と震災一次資料閲覧のため来室 | |
| 10. 4 | アーカイブカフェ「神戸からの便り 永
田助太郎と戦争と音楽」
(於：Café P/S.) | 10. 31 「西宮北口駅北東地区」で土地
区画整理事業が完了 |

2009 (平成 21) 年

- | | | |
|-------|-----------------------------------|--|
| 1. 16 | 神戸新聞論説委員森玉康宏、資料閲覧の
ため来室 | 1. 4 復興基金事業の継続を兵庫県
が決定 |
| 1. 21 | 神戸市外国語大学学生 8 名来室 | |
| 2. 19 | 神戸大学地域連携センター主催の震災
資料研究会に季村範江出席 | 3 月 JR 西日本、高架橋の柱約 3 万
2500 本の耐震化を完了防災 |
| 4. 25 | グッゲンハイム邸でコンサート | |
| 5. 25 | 人と防災未来センター資料室震災資料
専門員 3 名来室 | |
| 6. 12 | アーカイブ叢書『Love is 永田助太郎
と戦争と音楽』 | |

12. 22 トークイベント（於：旧グッゲンハイム邸）	7. 21 政府の地震調査委員会が「地震動予測地図」の改訂版公表。 9. 29 鉄人 28 号のモニュメント完成 10. 30 淡路市富島地区（旧北淡町）の復興区画整理事業が完了 12 月 「震災障害者」を神戸市が初集計、県も実態調査へ
-----------------------------	---

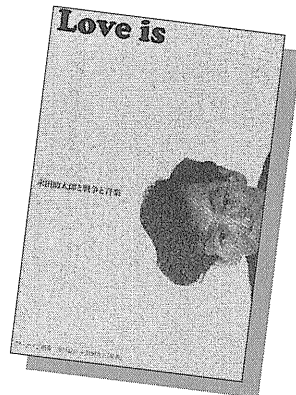
●主な活動

□アーカイブカフェ等

- ・第二回アーカイブカフェ 神戸からの便り「永田助太郎と戦争と音楽」
会場：Café P/S（神戸市灘区水道筋）
- ・「とある二都物語（トーク・イベント）山上の蜘蛛、あるいはボン書店の幻 モダニズム詩の光と影」
会場：旧グッゲンハイム邸（神戸市垂水区塩屋町）

●出版物

- 『サザエさんたちの呼びかけ』（瓦版『なます』集成）
- 『Love is 永田助太郎と戦争と音楽』季村敏夫＋扉野良人編集
- 「瓦版なます」 23～25号 23号編集人 季村敏夫
24号から編集人 佐々木和子



2010年(平成22)年

- | | | | |
|--------|---|--------|------------------------------------|
| 1. 12 | 港大尋、季村敏夫のライブ、笠原一人、寺田匡宏参加(於:ギャラリー島田) | 1. 12 | ハイチ大地震発生、死者20万人超える |
| 3. 2 | 中央区ボランティアセンター訪問、垂井加寿恵と意見交換 | 1. 17 | 神戸震災復興記念公園が開園 |
| 3. 30 | 鷹取中学校所蔵の震災資料視察、教頭と意見交換(於:鷹取中学校) | 1月 | 兵庫県、災害緊急支援隊を2010年度に創設 県内で大規模災害時に派遣 |
| 7. 20 | 中央区ボランティアセンター訪問、垂井加寿恵に聞きとり | 2. 15 | 兵庫県は「住宅再建共済制度」発表 |
| 8. 29 | 中央区ボランティア資料、鷹取中学校資料、「瓦版なまず」についての話し合い | 3. 31 | 心のケア担当教員配置が終了 |
| 10. 3 | 聞きとり調査について意見交換、「瓦版なまず」についての話し合い | | |
| 10. 22 | 午前鷹取中学校訪問、避難所資料を閲覧。午後「公的援助法」実現ネットワーク被災者支援センター訪問 | 10. 24 | 山手幹線が全線開通 |
| 11. 3 | 鷹取中学校、被災者支援ネットワーク訪問報告、「瓦版なまず」についての話し合い(11.28も) | | |
| 12. 13 | 被災者クラブの聞きとり(於:阪急六甲駅周辺) | | |
| 12. 16 | 人と防災未来センター研究員、阪本真由美、定池祐季、宇田川真来室 | 12. 22 | 宝塚市、借上復興市営住宅の契約期限の延長方針を表明 |
| 12. 25 | 「瓦版なまず」第26号についての打合せ | | |

2011(平成23)年

- | | |
|-------|---------------------------------|
| 1. 23 | 「瓦版なまず」第26号についての打合せ(2.13, 3.20) |
|-------|---------------------------------|

- | | |
|---|---|
| 3.26 「瓦版なまず」第26号発行 | 3.11 東日本大震災 |
| 4.24 活動内容の検討 | |
| 5.11 三浦照子氏資料の閲覧 | 3.28 復興土地区画整理事業が全20地区で完了 |
| 5.14 訪問の報告、許諾書をもらうことを決める | 4.27 政府の中央防災会議は、国の防災基本計画改定を決定。 |
| 5.28 瓦版『なまず』の執筆者への許諾書送付 | |
| 8.6 三浦照子氏資料の整理 | |
| 8.22 三浦照子氏資料点検 | 6.26 中央防災会議の専門調査会が、想定する地震や津波の規模を千年に一度に |
| 9.8 三浦照子氏資料の一部返却 | |
| 9.18 東日本大震災被災地訪問の報告 | |
| 9.25 ブックカフェ「東日本大震災」(於：京都徳正寺) | 10.24 兵庫県は東南海・南海地震で予測津波高を2倍の浸水シミュレーションを発表 |
| 10.9 「瓦版なまず」第27号についての打合せ(11.11) | |
| 12.4 長谷川忠一來室に関する打合せ | |
| 12.9 宮本隆司「地震と津波を受けとめて」自然災害を語るシンポジウム参加(於：神戸芸術工科大学) | 11.20 第1回神戸マラソン開催 |
| 12.25 長谷川忠一來室 | |

●主な活動

- これまで調査した資料の現状調査
- 三浦照子氏資料受け入れ
- 長谷川忠一氏資料受け入れ
 - 右上 自宅での保管状況
 - 右下 震災・まちのアーカイブへ移管

●出版物

- 「瓦版なまず」27号



2012 (平成 24) 年

- | | |
|---|---|
| <p>1. 15 「瓦版なまず」第 27 号についての打合せ
(2. 12、3. 25)</p> <p>2. 12 「瓦版なまず」第 27 号についての打合せ</p> <p>3. 25 長谷川忠一宅、所蔵資料見学、</p>
<p>4. 15 「瓦版なまず」第 27 号発行印刷</p> <p>4. 28 「瓦版なまず」第 27 号印刷・発送</p> <p>5. 20 長谷川忠一氏資料受け入れ</p> <p>6. 10 長谷川忠一氏資料の整理方法検討</p> <p>6. 17 シンポジウム「震災後の表現－神戸から
東北－」(於:風月堂ホール)</p> <p>6. 30 長谷川忠一氏資料の整理 (7. 15)</p> <p>7. 20 神戸からの発信「東北の復興、日本の明日」
赤坂憲雄講演(於:風月堂ホール)</p>
<p>10. 28 長谷川忠一來室、聞きとり</p> <p>11. 18 長谷川忠一氏資料目録確認</p> <p>12. 11 福島ドキュメンタリー映画(於:ギャラ
リー島田)</p> <p>12. 16 長谷川忠一への聞きとり</p> | <p>3. 23 東海・東南海・南海地震に備え、
津波高を 2 倍に引き上げた兵庫県
の浸水予測</p> <p>3. 31 内閣府の有識者検討会が「南海
トラフ」で最大級の地震発生時
の推計値公表</p>
<p>5 月 山崎断層地震による県内の直
接被害は最悪で約 5 兆 7 千億
円に</p> <p>6. 1 兵庫県が新防災計画で内陸 4
地震の被害想定を見直し</p>
<p>8. 29 南海トラフ地震の被害想定を
発表</p> <p>8 月 石綿禍での労災認定が相次い
で判明</p>
<p>12 月 兵庫県、借り上げ復興住宅への
継続入居を認める方針(年齢や
障害の有無など条件に)</p> |
|---|---|

2013 (平成 25) 年

1. 20 長谷川忠一氏資料群及び「瓦版なまず」
第 28 号について話し合い

- | | | | |
|--------|--|--------|-------------------------------|
| 2. 17 | 「瓦版なまず」第 28 号編集会議 | | |
| 2. 19 | 「資料保存を考える会」参加（於：人と防災未来センター） | | |
| 3. 10 | 長谷川忠一来室、聞きとり及び「瓦版なまず」第 28 号編集会議 | 3. 7 | 気象庁、新津波警報の運用開始 |
| 4. 13 | 「瓦版なまず」第 28 号発行 | 3. 18 | 内閣府が南海トラフ巨大地震の経済被害想定を公表 |
| 6. 9 | 長谷川忠一宅より資料搬出 | 3. 25 | 神戸市、借り上げ復興住宅の入居期限を一部延長へ |
| 6. 30 | 長谷川忠一氏資料整理の方針検討（7. 14） | 3. 27 | 借り上げ復興住宅 兵庫県が 80 歳以上世帯の継続入居容認 |
| 10. 14 | 長谷川忠一聞きとり | 4. 13 | 淡路島地震 |
| 11. 10 | 長谷川忠一の写真資料の整理方針検討 | 5. 28 | 南海トラフ地震対策最終報告 |
| 11. 30 | 2014 年 1 月 13 日のイベント打合せ | 7. 19 | 政府調査委が山崎断層帯の長期評価を一部見直し |
| 12. 14 | 2014 年 1 月 13 日のイベント・長谷川忠一の写真ネガ資料の処理について検討 | 7. 19 | 政府調査委が山崎断層帯の長期評価を一部見直し |
| 12. 22 | 2014 年 1 月 13 日のトークセッションの打ち合わせ（於：西宮市民交流センター） | 11. 22 | 南海トラフ特措法成立 |

●主な活動

□長谷川忠一氏資料受け入れ、整理

●出版物

□「瓦版なまず」 27、28 号

編集人 佐々木和子



震災・まちのアーカイブでの聞き取りの様子

2014 (平成 26) 年

- | | | | |
|--------|---|-------|------------------------------------|
| 1. 13 | トーク・セッション『記録をつなぐー災厄の現場から』（於：デザイン・クリエイティブセンター神戸 KIITO） | 1. 14 | 神戸市、借り上げ復興住宅一部買い取り |
| 3. 30 | 「瓦版なまず」第 29 号発行 | 2. 19 | 南海トラフ地震で兵庫県想定（津波浸水域は国試算の 3・2 倍） |
| 7. 12 | 冊子『小さな声をつなぐー震災の現場から』の発送 | 3. 28 | 政府、南海トラフ地震対策の基本方針となる「基本計画」決定 |
| 7. 30 | 認定 NPO 法人「市民活動センター神戸」の資料整理について意見交換、長谷川忠一氏資料整理 | 4. 17 | 震災 20 年事業がスタート |
| 8. 2 | 認定 NPO 法人「市民活動センター神戸」の資料確認 | 6. 3 | 南海トラフ地震で兵庫県が被害想定発表 最悪で死者が 2.9 万人に |
| 10. 11 | 長谷川忠一來室、住宅に関する聞きとり | 6 月 | 兵庫県、借り上げ復興住宅の入居要件緩和へ（育児、介護世帯も入居延長） |
| 10. 29 | 「瓦版なまず」次号について、長谷川忠一氏資料、記録室資料整理 | | |
| 11. 15 | 若原キヌ子（被災地クラブ）来室、聞きとり | | |
| 11. 26 | 「瓦版なまず」次号について編集会議 | | |
| 12. 13 | 2015 年 1 月 10 日のイベントについて、「瓦版なまず」次号について編集会議 | | |

2015 (平成 27) 年

- | | | | |
|-------|---|-------|-----------------|
| 1. 10 | 今後の活動について話し合い、「いいたてミュージアムーまでの未来へ記憶と物語プロジェクト」「TALK」に参加 | 1. 17 | 阪神・淡路大震災から 20 年 |
| 1. 24 | 長岡市立中央図書館文書資料室田中洋史が訪問 | | |

- | | | | |
|-------|---|------|-------------------------------------|
| 2.4 | 神戸新聞報道部記者木村信行が訪問 | | |
| 2.21 | 資料整理の方法検討、「瓦版なまず」次号について編集会議 | | |
| 3.11 | 資料整理の方法検討、事務所の整理、記録室、長谷川忠一氏資料運び入れ検討、資料保存箱 40 箱購入 | 3.10 | 多くの震災遺構が解体 |
| 4.25 | 長谷川忠一氏資料、「認定 NPO 法人 市民活動センター神戸」の資料の受け入れ | | |
| 5.17 | 「瓦版なまず」第 30 号発行 | 5.14 | 災害援護資金 8 割「免除」 |
| 6.13 | 事務所引越準備開始 | | |
| 7.4 | 東日本大震災被災地巡検（～7.6 リアス
アーク美術館（気仙沼）—女川—石巻—
大川小学校—福島—飯館村） | 9.10 | 阪神・淡路大震災災害援護資金
3769 人返済不能判定（神戸市） |
| 10.10 | 長谷川忠一來室、事務所引越準備 | 9.28 | 借上げ復興住宅、迫る退去期限 |
| 12.19 | 冊子完成 | | |

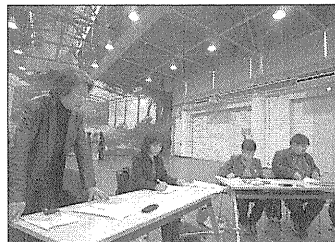
●主な活動

□トーク・セッション『記録をつなぐー災厄の現場から』

於；デザイン・クリエイティブセンター神戸
(KIITO)

日時：2014 年 1 月 13 日

□長谷川忠一氏資料整理



トークセッションの様子

●出版物

□『小さな声をつなぐー災厄の現場から』

□「瓦版なまず」 29、30 号

編集人 佐々木和子



最近の動き（2016～17年）

2016年（平成28年）

1. 5 「阪神・淡路大震災復興基金」の基金が17年度で底を突く見通しが明らかに
1. 6 東遊園地での追悼行事を支えたボランティア「神戸・市民交流会」が最後の作業
多言語コミュニティ放送局「FMわいわい」も3月末でFM放送を終え、インターネット放送へ、被災者生活再建支援法制定市民運動の拠点「山村サロン」（芦屋市）、
8月に閉館
1. 13 15年に神戸市内7区で独居死し、8日以上たつて発見された人は186人で過去最多
2. 10 アーカイブ事務所引越① 於：長田→垂水 以降、4.24 引越② 6.4 引越③
2. 16 借り上げ復興住宅の一部が20年の契約期限を迎え、神戸市が明渡しを求め入居者を提訴（県内で初、5月には西宮市も提訴）
2. 26 神戸空港建設よりも被災者の生活再建を訴え、住民投票運動を率いた元大阪工大助教授の中田作成さんが死去（8月、阪神・淡路復興委員長を務めた下河辺淳、12月、大震災対策担当大臣の小里貞利が死去）
3. 12 草アーカイブ会議（仙台メディアテーク）に佐々木和子が参加
4. 9 佐藤知久（京都文教大学）、震災・まちのアーカイブを訪問
4. 14 熊本県などで大地震発生（4.16 本震）

2017年（平成29年）

1. 12 被災高齢者らに24時間常駐対応の「生活援助員」、芦屋市が廃止へ
1. 13 震災で焼失、共同スーパーとして再スタートした「味彩館」（旧菅原市場）が閉店
2. 24 阪神・淡路大震災で被災の神戸市役所2号館老朽化で建て替え、高層化へ
3. 15 被災者の生活・住宅再建や産業再生を支援した「阪神・淡路大震災復興基金」が、資金が底をつく2020年度で全ての事業を終える見通しであることが判明
3. 18 電話や郵便による県外被災者への支援事業終了（帰県率は27.6%）
3. 19 「瓦版なまず」第31号発行（於：垂水）
6. 30 震災後の新長田南地区の活性化モデル事業として、神戸市が誘致したアニメ関連商業施設「神戸アニメストリート」が閉鎖、長田区周辺のケミカルシューズ産業を支援する市の第三セクター「くつのまちながた神戸」も解散した
10. 4 神戸・長田活性化の拠点へ（県・市合同庁舎が着工）
11. 10 国立女性教育会館客員研究員青木玲子・NPO法人男女共同参画おた青木千恵、震災・まちのアーカイブを訪問

- 11.14 神戸塾火曜サロン「父たちの戦争」南輝子・玉川侑香・所薫子報告（於：ギャラリー一島田）
 - 11.20 国立女性会館アーカイブ保存修復研修に佐々木和子が講師に
 - 11.28 神戸塾火曜サロン「食物と戦争と記憶ーパンと野イチゴ」山崎佳代子報告（於：ギャラリー一島田）
 - 12.6 尼崎市が災害復興住宅の高齢者見守り事業を 2017 年度で廃止へ（神戸市や宝塚市は 18 年度以降も存続へ）
 - 12.16 子どもの心のケアを担った「浜風の家」（芦屋市）18 年 1 月の閉館・取り壊しへ
-

●主な活動

□事務所の引越し

長田区東尻池町

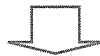
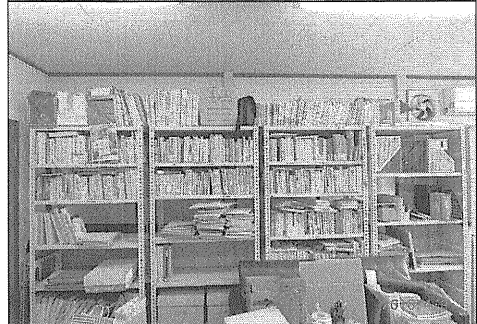
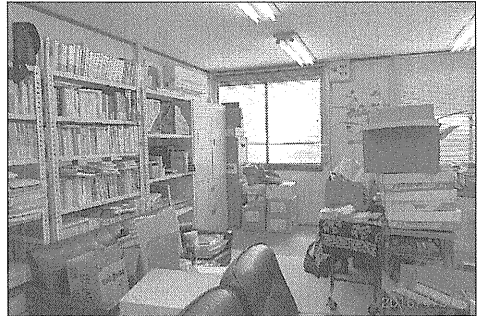
⇒垂水区旭が丘へ

□長田区の事務所の整理

垂水へ運ぶ資料の選別

□活動の見直し

□20 年記録誌作成へ



公 開 提 言

阪神・淡路大震災メモリアルセンター 展示計画に関する 公開提言

はじめに

阪神・淡路大震災発生から5年半の歳月が経過した。

現在、国と県によって阪神・淡路大震災メモリアルセンターの整備計画が進められている。

震災は、社会の中で様々な記録活動が試みられる出来事であった。震災直後から多くの手記が発表され、様々な記録活動が取り組まれた。私たち震災・まちのアーカイブも、1995年5月に震災・活動記録室として発足して以来、5年間、震災の記録・資料の保存活動に取り組んできたNPOである。

今回、国・県がメモリアルセンターの展示に関して、展示案の公募を行っている。

そこで私たちは、市民社会における資料保存という公共性を担うNPOとして、メモリアルセンター展示に関する提言をここに発表したい。

1 震災を記憶することとは何か

震災メモリアルセンターとは震災の記録・記憶を残すことに関わる施設である。では震災を記憶することとはどういうことだろうか。

そもそも震災とは何だったか。

震災とはあらゆるものが壊れる経験だった。壊れたのは、建物だけではない。既製の組織、機構をはじめとして、私たちの概念事態が揺さぶられ壊れた。震災とは、その崩壊に直面したものが何とか立ち上がりろうとする体験であった。

一方、震災とは語りえない体験でもある。死者にとって、あるいはトラウマを持った人にとって、震災とは、語りえない体験である。

震災とは壊れることであり、語りえないことであるということ。

ではそれを記憶することは可能だろうか。震災を体験していない人々に伝えることは可能だろうか。

この困難な課題に対しては、震災体験の普遍化、震災体験を文化的に高めて表現することが必要になる。過去の、ホロコースト、ベトナム戦争、広島や水俣における表現の歴史は、その課題に対峙するものであった。

私たちは見えないものを記憶に残してゆこうとする課題に取り組んでいるのだということを銘記しておきたい。

2 どのような展示が必要か

どのような展示が必要か。

かたちのないものを残そうとしていること、語りえないものを語ろうとしていることを自覚し

た上で、私たちの何が壊れ、そしてそこからどのように立ち上がったのかを等身大の形で描くことである。

人がどのように行動したのか、事実をありのままに伝える。可能な限り一次資料に基づいて事実を提示する。それを真摯に行えば、見るものに震災の教訓は十分に伝わる。大自然の力を知ることには必要である。しかし、「驚愕の映像空間」(兵庫県案にある表現)は必要ないと思う。

以上の点をふまえ、具体的な展示計画については、以下の3点を提言する。

まず第一に震災に関するあらゆる研究や表現から学んだ展示である。

震災発生から5年間で膨大な震災研究や検証活動、芸術表現が蓄積されてきた。それらの営為に学んだ展示を行う必要がある。

その際重要なのは、展示業者に任せず、震災研究者、学芸員、芸術家など震災に関する様々な人々の英知を結集することである。また当然ながら、センター設置後に研究員、アーキビスト、学芸員、ライブラリアン、職員として勤務することになるスタッフが企画段階から展示計画に参画することも必要である。

第二に、進化する展示である。

日々刻々と変化する震災研究や震災に対する社会の見方の変化を取り入れた展示が必要である。

現在、博物館の分野では、ジオラマや映画・ビデオをはじめに一度に作ってしまうことは、内容が古くなった際に更新が困難であり、リピーターを呼び込めないことから時代遅れの発想となりつつある。一度つくってしまうとその内容を変更することが容易でない設備を作ることよりむしろ、内容の変更の可能な常設展と、様々な主題による年数回の企画展を組み合わせた展示を行うことが必要である。テーマごとの企画展を行うことによって、様々な問題関心を持った観覧者を呼び込むことが出来ると考えられる。

第三に展示を見た人が、震災を自分のこととして考えられるための仕掛けを用意することである。

これは個人用のコンピューター端末を用意することではない。必要なのは、コンピューターではなく人である。震災情報を教えてくれる人、様々な震災研究やNPOのネットワークにアクセスする道筋をつけてくれる人である。これらの人を震災の「語り部」と呼んでもよいだろう。これまでの「語り部」とは、その人の体験を語る人を意味していた。しかし、今時代が求めている「語り部」は、現在震災でまちはどう変わったのか、震災研究はどのような状態にあるのか、あるいは震災に関して被災地のNPOはどのような活動をしているのか、そこに加わるためにはどのようなアクセス手段があるのかななどを、わかりやすい言葉で語り導いてくれるコーディネーター機能を持った「語り部」である。そのような仕掛けが、震災を一人ひとりが自分のこととして捉えられることにつながると考える。

3 展示を支える人とネットワーク

以上のような展示を支えるためには、人や様々な団体のネットワークが必要となる。

メモリアルセンターの構想としては、研究機能、資料の収集・保存機能、図書の収集公開機能、展示機能が提示されているが、それぞれについて、研究員、アーキビスト、ライブラリアン、キュレーター(学芸員)という専門家が必要である。

①研究員

震災研究はそれぞれの学問分野で日進月歩しているが、その最先端の研究をフォローし、同時に新しい研究領域を開拓しう能力を持った研究者が必要となる。震災研究は、一つの学問分野のみで完結する研究ではない。また同時代の問題意識と密接に切り結ぶことが求められている。幅広いキャリアと専攻分野の研究者を置くことが必要である。また、現在県の計画案では任期制が提唱されているが、任期のない長期的な視野でセンターの運営に関わる研究者も必要であると考えられる。

②アーキビスト

アーキビストとは一次資料の取り扱いに関する専門家である。

震災に関する一次資料は膨大に存在し、その所在調査は阪神・淡路大震災記念協会によって行われているものの、手が着けられたばかりであるし、現代史の資料学に関しては歴史学界でも手探りの状態である。それらの動向を見据えた専門家が必要となる。

また資料に関しては、受け入れ、分類、整理、補修、保存などそれ固有の取り扱いが必要となる。さらに、資料を寄贈してくれる人はアーキビストとの個人的な信頼関係のもとで大切な資料を寄贈しようという気になるのである（「あなたがいるからこの資料はメモリアルセンターに託します」）。

それゆえ、資料の収集と保存に責任を持つ、専門的訓練を受けたアーキビストが必要となるのである。

②ライブラリアン（司書）

ライブラリアンは文献資料の取り扱いに関する専門家である。

阪神・淡路大震災大震災に関しては膨大な量の文献が出版された。その内容は一般的な書籍や雑誌はもとより専門的な研究誌、海外の文献など多岐にわたる。

それらの文献を収集し、研究者、一般利用者に利用の便を図るために、ライブラリアンが必要である。

③学芸員

学芸員は展示に関する専門家である。

学芸員とは先端の震災研究と展示を架橋する存在である。現在研究の水準ほどの程度のもので、そこでは何が問題となっているのか、その課題は何か、これらを展示という形に置き換える役割を担うのが学芸員である。

「新しい情報を常に取り込み進化する展示」を可能にするためには、研究の最先端の動向をフォローし、また展示技術に関する研鑽を積んだ学芸員の役割が大きなものとなる。

④ネットワーク

メモリアルセンターの機能は、研究、展示、資料保存、などにかかわる研究者、市民、NPO のネットワークの中で営まれる必要があり、そのことによって、震災研究のセンター機能は保証されると考えられる。

また防災に関しても阪神・淡路大震災が、教訓として残したのは、広範なネットワークが必要であるということであり、そのコーディネーターの必要性が浮き彫りになった。

メモリアルセンターがネットワークの拠点として機能するためには、市民 NPO が使える空き部屋を用意するのではなく、常勤のコーディネーターが常駐する必要があると考えられる。

おわりに

阪神・淡路大震災は、後世に残る事件である。(すでに高校の歴史の教科書には、「1995年1月17日、阪神・淡路大震災起こる」と記述されている)

60億円を投じて建設されるメモリアルセンターも、今生きている私たちの生命を超えて後世に残る施設である。

一体私たちは、阪神・淡路大震災を50年後の人々にどう伝えるのか。100年後の人々にどう伝えるのか。

可能な限りの想像力と知恵を出し合ってこの施設を造り上げることが、私たちに求められている。

送付先

朝日、毎日、神戸、読売、神戸新聞情報センター、島田誠氏、実吉氏
NHK、
県会議員、国会議員
北原糸子

